

故 志保田務博士の晩年の取り組み：
遺された資料の分析から見てきたもの

前川 和子

(桃山学院大学特別研究員・元大手前大学教授)

The Late Dr. Tsutomu Shihota's Research Activities
in His Later Years: What Became Clear from the Analysis
of the Documents Left Behind

By Kazuko MAEKAWA, Ph.D.

(Researcher at St. Andrew's University)

志保田務 (1937.9 – 2023.12) は生涯を通して研究センターの生活を送った。本稿では、晩年を中心にまとめる。幸いにも志保田の蔵書は、一括してご家族より譲り受け、桃山学院大学個人研究室保管を経て、2024 年 9 月から有志の自宅 5 カ所に保管されている。志保田の蔵書の整理は、図書や雑誌は後回しにして、まず形は図書の形をとっているが、広く刊行されていない資料やコピー類を中心に行った。晩年の研究活動とともに、その資料類を重ね合わせて、志保田の関心がどのようなものであったかを探ってみた。

1 はじめに：志保田務博士の概略

志保田は、生前自分のことを知りたければ「日本図書館研究会 75 周年誌」を見よ、と語っていた 1)。

また、2023 年 5 月 3 日のメールには、志保田自身が示した人生の区分が書かれていた。以下の通りである。

- 第 1 期：** 遊民生活から、上級受験、国立大学辞退 (恩師：天野敬太郎、大山綱憲、木原通夫先生の薫陶)。大阪府立系大学図書館入職と、良き先輩 (横井時重、堀啓次郎、玉井敏之、藤沢徳男) <日図研>：良き活動環境と同志との出会い。国公立大学図書館協議会での活動
- 第 2 期：** NAL: 整理技術研究グループの活動など、JLA: 目録会議 (新版予備版の時代)
- 第 3 期：** 桃山学院大学初期ゼミ生との出会い等、NCR1987 年版、NDC 新訂 9 版、BSH4 版
- 第 4 期：** 国際交流と学修の時期 (1): IFLA 東京大会発表等、留学、在外研究、ホーナー図書館員交流、ALA 大会
- 第 5 期：** 学修の構築：第 1 回 TP&D フォーラム「書誌階層論」発表など、京大講師、図書館情報大学院学修・博論博士号 2004 年 3 月

第 6 期: 国内団体関与の時期 JLA 常務理事・教育部会長など, 認定司書委員会担当理事

第 7 期: NAL 史域業務: 50 年史ほかの短期時代史跡など, 石塚記念, 岩猿記念

第 8 期: 国際交流と学修の時期 (2): 図書館を学ぶ相互講座と I-LISS

志保田は, 自身の人生を第 1 期から第 8 期まで, 以上のように分けている。本稿が対象にするのは, 第 7 期か第 8 期にあたる部分である。第 7 期までは, 2025 年 12 月発行予定の『志保田務先生追悼集』に記録されることになるので, ご参照いただきたい。

2 図書館情報学研究者・学者の蔵書

長年研究生生活を続けた研究者は, その研究分野独特の蔵書を形作っていると思われる。志保田は情報資源組織を専門としてきた。ご家族の厚意で『志保田務先生追悼集』編集委員会が, そのコレクションを譲り受けた。

一般に図書館情報学者の逝去後, 大抵は散逸した蔵書が多いと聞いている。日本国内で, まとめて残されている蔵書をネット検索すると, 以下のものがあつた。これ以外に, どちらかの図書館で保存されているコレクションがあるかも知れない。ネットでは, 1. と 2. が出てくる。

1. 武田虎之助の蔵書「虎文庫」の場合 鶴見大学図書館が保存

武田は, 台北帝国大学図書館 (台湾) から文部省, そして, 鶴見大学図書館司書養成課程の教員であつた。

2. 竹林熊彦の蔵書「竹林文庫」の場合 同志社大学図書館が保存

竹林は, 同志社専門学校 (現在の同志社大学) を卒業後, 九州帝国大学図書館司書官, 京都帝国大学図書館司書官であつた。1927 年に青年図書館員聯盟創立メンバーとして加わり, 『近世日本文庫史』の著者としても有名である。

3. 清水正三の蔵書の場合 日本図書館協会が保存している。

清水正三氏の蔵書

清水正三 (1918 – 1999) は, 1951 年に慶応義塾大学で行われた文部省主催の第 2 回図書館指導者講習会に参加したこと, 1959 年の「アメリカ図書館研究調査団」に公共図書館の代表として派遣されたこと 2), 特に 1963 年『中小都市における公共図書館の運営 (中小レポート)』3) を刊行した一人であつたことで著名である。

その清水の蔵書が日本図書館協会 (以下, 日図協) にある, というのはよく知られていることである。『図書館人物事典』4) の編集で有名な奥泉和久が, 自身の問題意識のため清水の生の資料によって, その疑問を解消できたことは, 日図協の努力のおかげであつた。

ここで注意せねばならないことは, 清水が第 2 次世界大戦後の日本の公共図書館界のリーダーの 1 人だつたこと, 『中小レポート』刊行の重要人物だつたことを, ご家族はご存じだつたかどうか良く分からないが, その蔵書をすぐに処分しようとしたことである。逝去の当時, 日図協関係者が清水の

蔵書を残す努力が無ければ、今日日図協にも無く、重要な清水の資料は永久に失われてしまったであろうことである。

日図協では、日図協図書館がサービスを開始している。清水の蔵書について、蔵書目録は作成されていないが、保存されていて、閲覧は自由にできる状態である。しかし、現在の日図協図書館は、専門の司書 2 人の待遇は非正規職で、図書館が大部な仕事を処理せねばならないにもかかわらず、他の部署の仕事の応援もせねばならない人手不足な状況は、図書館の業務を知るわれわれにとって看過できないことといえる。

3 志保田蔵書の譲渡を受けた経緯

3.1 ご家族からの連絡 → ご家族に相談 → 承諾を頂き 搬出・搬入

志保田は 2023 年 12 月 25 日に逝去、12 月 31 日に告別式があった。翌 1 月 5 日にご家族から、中村恵信事務局長を通して、志保田の蔵書について「必要と思われる本があれば、取りに来てください」と連絡が入った。その連絡のおかげで、すべてが失われる可能性を避けることができた。『志保田務先生記念集』5) の編集委員会メンバーの決定によって一括して頂きたい申し出をご家族に伝えた結果、承諾を得た。

3.2 搬出のための準備作業について

本の移動は、図書館員歴が長かったので、経験があった。

3.2.1 準備作業の内容

志保田の書斎の書架一段ごとに、段ボール 1 箱に詰めることとした。その中の一番多いと思われる資料種別の記号を記した大き目の付箋紙を、書架の段に貼った。

蔵書の整理にあたり、3 種類の記号を用いた。まず資料種別の記号 (A)～(E) を段ボール箱に記入した。

- (A) 図書 (刊行されている)
- (B) 雑誌
- (C) 図書以外で本の形のもの
- (D) コピー類
- (E) それ以外の雑多なもの

次に、大まかな主題に分けた。

- (あ) 図書館情報学関係
- (い) それ以外の学術的な資料
- (う) 一般書・一般的なもの

(え) その他 (志保田のご趣味らしいもの)

3つ目の数字は、マンション内の書架の場所を示している。

以上の記号付けによって、例えば「1-あ-A」の場合、図書館情報学関係の図書で、志保田の大きな仕事机の前の書架に置いてあったということを表す。1段の中で1番多いと思われる資料種の記号を入れたので、その1段の中に様々な資料種が混ざる場合がある。

搬出前のこの作業や、書架の段の片付け作業は、2名で2日分の仕事となった。

搬出時は、搬入先の桃山学院大学個人研究室に受取り担当が待機した。あらかじめ研究室内のどの場所にどの段ボールを収めるかの「配置図」を作成しておき、業者がその通り納品するのを確認した。

3.2.2 整理作業をして分かった事

整理作業をして、志保田は研究に使用した資料を、

- 研究が一段落した後、特に整理をしておかない(そのまま、ほっておかれた)
- 興味のあるテーマは、研究の始まり時にまずファイルを作られていたようである。そのようなファイルが少なくない数遺されている

であることが分かった。

3.3 桃山学院大学での保存

2024年2月から9月まで、桃山学院大学個人研究室に保存できた。

- 2月11日の段階では、5月末までの保存予定だったが、その後、藤間教授の熱心な交渉により9月まで保存できた。

3.4 蔵書の整理

蔵書の整理のために、2月～5月まで計9回通った。整理内容は4.4を参照の事。

- 次の移動があるため、段ボール箱に入れたままで保存し整理した。
- 個人研究室内の「配置図」を用意して保存した。各段ボール箱に、資料種別、大まかな主題の記号を付していたので、整理がしやすかった。

4 志保田博士リタイア後の研究活動，研究テーマ，そして蔵書の内容

4.1 新しい学術交流の「場」

晩年の研究活動を見る時、志保田は研究、学術交流の「場」の必要性・重要性を意識していたと考える。それらは、(1) 図書館を学ぶ相互講座 (2) I-LISS (International Library and Information

Science Society: 国際図書館情報学会) への参加と日本支部の創設 (3) *Journal of I-LISS JAPAN* の創刊 に現れていると思われる。

4.1.1 (1) 図書館を学ぶ相互講座

大阪府立中之島図書館から、藤井兼芳 (当時課長) を通して志保田に、館内の元食堂を活かすことについての依頼があった。志保田はこの「場」を図書館情報学に関わる人たちの交流、さらに市民とも交流できる「場」として活かすことを考えた。2024 年 3 月までの 15 年間で延べ 200 名の方の発表の場となった。

4.1.2 (2) I-LISS への参加と日本支部の創設

志保田と韓国の呉東根 (啓明大学校教授) との学術交流は長く、志保田が桃山学院大学学術交流委員時代に啓明大学校での呉との出会いから始まった。呉はインドへ講義を行うなどインドとの関係も深く、当地の研究者と共にアジアを中心とした図書館情報学会を設立することになり、親しい志保田に協力を呼びかけた。2015 年インドの SRM 大学で設立の大会があり、志保田は三宅 (桃山学院大学教授)、前川を伴い、設立に参加した。2015 年は I-LISS にとって歴史的な年であった。

その後 2016 年に、志保田は日本支部を設立した。したがって、I-LISS JAPAN は世界の I-LISS の一支部であり、そのような支部は韓国、インド、タイ、インドネシア、日本など 10 か国以上に存在している。

2017 年 8 月 12 日 (土) 日本支部設立セレモニー時、呉は訪日し LISSASPAC (当時) 会長として祝辞と記念講演「韓国の図書館情報学の教育と研究：現況と展望」を行った。同年 11 月 10 日 (金)・11 日 (土) 釜山 (韓国) の東儀大学校で韓国図書館・情報学会共催国際学会に志保田は招かれ基調講演を行ったのは、8 月の設立セレモニー時の感謝の意味があったといわれている。この時同伴した前川の「随行記」6) がある。

4.1.3 (3) *Journal of I-LISS JAPAN* の創刊

Journal of I-LISS Japan という学会誌の前に、*Journal of LISSASPAC JAPAN* (アジア太平洋図書館情報学会日本支部誌) という雑誌が刊行されていた。この雑誌は、第 1 巻の第 1 号と第 2 号のみの雑誌である。第 1 号は 2017 年 8 月に、第 2 号は 2018 年 2 月に刊行された。第 1 号は、I-LISS JAPAN の前身である LISSASPAC 日本支部の設立セレモニーとそれを記念した研究講演会が開催されたのだが、この雑誌の第 1 巻第 1 号であると同時に、研究講演会の『予稿集』を兼ねたものであった。この時、日本支部設立の大会の実行委員長を前川が担当し、ジャーナルの編集委員も兼ねていた。第 2 号は設立記念研究発表内容の記録号となっている。

Journal of I-LISS Japan の創刊は、2017 年 8 月号の第 1 巻第 1 号となる。2023 年には、第 6 巻 1 号まで刊行された。このジャーナルの特徴の 1 つは、I-LISS JAPAN の機関誌であるだけでなく、I-LISS という世界学会と繋がりがあるということである。ホームページは <https://www.i-liss.org> である。

このジャーナルの登場によって、日本に研究成果を発表できる「場」が新たに用意されたといえる。

投稿できるのは会員なのであるが、会員であれば論文、研究ノート、その他が自由に投稿できるのである。図書館情報学分野の者にとっては、従来から、日本図書館情報学会、日本図書館研究会、三田図書館・情報学会、日本図書館文化史研究会、西日本図書館学会など、研究成果を発表できる「場」があるが、そこに、志保田務が生み出した新しい図書館情報学の「場」がさらに加わったのである。

4.2 リタイア以前から継続している研究活動

以上の新しい活動の「場」を広げたとともに、従来からの研究活動も継続していた。図書の出版、日図研における研究グループ活動、日図研の理事・委員長としてのご活躍等がある。

2008～2023 年までの約 16 年間を CiNii で検索すると、76 件の執筆が確認できた。1 年間で 4,5 本書いていることになる。

4.2.1 図書の発行

図書はこの期間、14 冊刊行があった。そのリストは、表 1 参照。この中で代表的と言える図書を 3 点あげると、以下の 3 冊ではないかと思われる。

1 冊目は、3 の『図書館サービス概論』である。故杉山誠司との共著であり、特に杉山が力を入れて執筆した著作でもあった。2 冊目は、山本順一責任シリーズ編集の(ミネルヴァ書房)の『情報資源組織論』である。志保田には図書館界でも有名な情報資源組織分野のテキストがあり、長年改訂を重ねたものがある。しかし、志保田は山本から依頼され、新たにテキストを作成したものである。2014 年に出版され、2016 年には改訂第 2 版を出版した。3 冊目は、14 冊目の『情報資源組織法』第 3 版である。2021 年 3 月に出版された。図書館界のベストセラーと言われているこのテキストは、使用することによって、日本の司書養成教育の様々な問題点を考える機会となる。1 つは、志保田の教えるにあたっての工夫が随所にあることである。2 つ目は、受講生各自に NDC や NCR が用意されていない大学であっても、その本質を説明し、演習により NDC や NCR が使いこなせるようになるための、簡易版が含まれている。故木原通夫とともに作って来たテキストは、その内容の成熟度を感じることができる。先の 1 の概略で区分の第 1 期に恩師として木原通夫の名前が挙げられている。

4.2.2 日図研における研究グループ活動

志保田は、2008～2023 年までの間に、研究グループとして 10 回発表している。表 2 参照。その中の 2008 年と 2017 年は大変興味深いと思われるので取り上げてみたい。

1 つ目の藤間真、家瀬淳一と共同研究したテーマは、当時大きな話題となった『図書館戦争』であった。この図書を対象に、図書館情報学的にアプローチしようとした志保田らは、この対象を新鮮な視点で捉えたといえる。

同じく 2009 年ベストセラー『もしドラ』で有名な『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』を大変面白いからと勧められたことがある。表紙はかなり目を引く女の子のイラスト入りであったが、志保田はこの表紙のままカバー無しで、楽しそうに持ち歩いていた。以上のように、ベストセラーも抵抗なく読み、学問的にどう捉えるかを試みた志保田の姿勢

表 1 図書の発行

- 1 志保田務, 北克一, 山本順一編著『学校教育と図書館：司書教諭科目のねらい・内容とその解説』第一法規, 2008.
- 2 志保田務, 高鷺忠美, 平井尊士共著『情報資源組織法：資料組織法・改』第一法規, 2012.
- 3 志保田務, 杉山誠司, 家瀬淳一編著『図書館サービス概論』学芸図書, 2013.
- 4 志保田務, 高鷺忠美編著『情報資源組織法演習問題集』第一法規, 2013.
- 5 原田安啓著 (志保田務, 高鷺忠美)『図書・図書館史：此処に無知終わり, 「知」始まる』学芸図書, 2013.
- 6 志保田務, 北克一, 山本順一編著『学校教育と図書館：司書教諭科目のねらい・内容とその解説』第一法規, 2014.
- 7 志保田務編著『情報資源組織論：よりよい情報アクセスを支える技とシステム』ミネルヴァ書房, 2014.
- 8 志保田務, 高鷺忠美編著；平井尊士共著『情報資源組織法』第 2 版, 第一法規, 2016.
- 9 志保田務, 高鷺忠美編著『情報資源組織法演習問題集』第 2 版, 第一法規, 2016.
- 10 志保田務編著『情報資源組織論：よりよい情報アクセスを支える技とシステム』第 2 版, ミネルヴァ書房, 2016.
- 11 志保田務ほか編『日本図書館学の奔流：岩猿敏生著作集』日本図書館研究会, 2018.
- 12『分類・目録法入門：メディアの構成』新改訂第 6 版 木原通夫, 志保田務著 第一法規 新改訂第 6 版 / 志保田務, 田村俊明, 村上幸二改訂 2020.
- 13『情報資源組織法演習問題集』第 3 版 志保田務, 高鷺忠美編著 第一法規 第 3 版 / 志保田務, 前川和子編集代表；柳勝文, 中村恵信, 園田俊介編集 2021.
- 14『情報資源組織法』第 3 版 志保田務, 高鷺忠美編著 第一法規 第 3 版 / 志保田務, 前川和子, 家瀬淳一改訂 2021.

は注目すべきものと思われる。

次の 3 の「埋もれた自館関係史料の発掘と、館史公開、発刊への運び」は、2017 年発表のものである。園田俊介は元津島市立図書館館長で、当館は 1995 年に 100 周年を迎えた歴史のある図書館であるので、100 周年記念誌が作られた。その折園田は、自館に眠っていた自館 (公共図書館) 資料 (史料) を発見した。その資料を中心に、日本国内の公共図書館史資料を探索・調査したものである。この時期創立 100 年を迎える図書館が多くあった。この研究を通して、丁寧な調査研究法を志保田から共同研究した山田、前川はともに学ぶことができた。

表 2 日本図書館研究会研究大会発表内容

- 1 藤間真, 家瀬淳一, 志保田務「『図書館戦争』シリーズの表現に関する図書館情報学的考察」(図書館奉仕研究グループ)『図書館界』60(2), 2008, p.142-152.
- 2 立花明彦, 志保田務「“高齢者への図書館サービス”の講義メニュー：考察と展望」(図書館サービス研究グループ)『図書館界』66(2), 2014, p.146-154.
- 3 園田俊介, 前川和子, 山田美雪, 志保田務「埋もれた自館関係史料の発掘と、館史公開、発刊への運び」(図書館資料保存研究グループ)『図書館界』69(2), 2017, p.151-158.
- 4 鎌田均, 家瀬淳一, 常世田良, 孫誌街, 中村恵信, 志保田務「能動的図書館サービスモデル, エンベディッド・ライブラリアンをめぐって：アメリカにおける展開と日本における同様事項の追究」(図書館サービス研究グループ)『図書館界』69(2), 2017, p.118-124.
- 5 村上幸二, 志保田務「図書館サービスの現場と「研究」の相関：図書館情報学関係誌の投稿規定を中心に」(図書館サービス研究グループ)『図書館界』70(2), 2018, p.432-441.
- 6 孫誌街, 山田美雪, 前川和子, 大城善盛, 志保田務「アジアにおける図書館情報学研究交流：最近の動き」(図書館サービス研究グループ)『図書館界』71(2), 2019, p.142-149.
- 7 家瀬淳一, 村上幸二, 志保田務「図書館関係逐次刊行物の廃刊と爾後」(図書館学資料保存研究グループ)『図書館界』73(2), 2021, p.135-141.
- 8 山田美雪, 孫誌街, 前川和子, 志保田務「コロナ禍の図書館サービス：アジアにおける瞥見」(図書館サービス研究グループ)『図書館界』74(2), 2022, p.129-135.
- 9 家瀬淳一, 村上幸二, 中村恵信, 志保田務「出版における退却とその出版物, 記事入手アベイラビリティの一検討」(図書館学資料保存研究グループ)『図書館界』74(2), 2022, p.136-141.
- 10 家瀬淳一, 志保田務「書評紙(誌)・出版業界紙(誌)の消長と図書館におけるアベイラビリティ」(図書館学資料保存研究グループ)『図書館界』75(2), 2023, p.133-137.

4.2.3 日図研研究委員長等としての活動：研究委員長 2007～2012 年，図書館研究奨励賞選考委員長 2013～2016 年

リタイア以前から継続している研究活動の3つ目は、日図研研究委員長等としての活動である。研究委員長は 2007～2012 年，図書館研究奨励賞選考委員長として 2013～2016 年まで活躍した。研究委員長としては、「テーマ設定の趣旨」，「研究大会の全体報告」など，16 件ある。その他，記念特集号の執筆，書評・新刊紹介も残している。また，親しかった西田文男氏，愛弟子たち，平井尊士氏や阪上宏一氏への追悼文も遺されている。理事が回り持ち担当している巻頭言『座標』など，計 27 件がある。詳しくは表 3 を参照。

表 3 日図研委員長として等の執筆

- 1 「テーマ設定の趣旨 (<報告> 2008 年度特別研究例会報告「自治体活動を展ばず公共図書館の支援」)」『図書館界』60(3), 2008, p.204.

- 2 「テーマ設定の趣旨 (<特集> 2007 年度図書館学セミナー 多文化社会の図書館サービス)」『図書館界』 59(6), 2008, p.338-339.
- 3 「テーマ設定の主旨 (<特集> 第 49 回研究大会シンポジウム 現今の教育法制の改変と図書館)」『図書館界』 60(2), 2008, p.54-55.
- 4 「テーマ設定の主旨 (図書館サービスの持続的発展を探る-生涯にわたる学びを支える図書館からの発信- <特集> 第 50 回研究大会シンポジウム)」『図書館界』 61(2), 2009, p.74-75.
- 5 「全体報告 (<特集> 第 50 回研究大会)」『図書館界』 61(2), 2009, p.70-73.
- 6 「テーマ設定の趣旨 (シンポジウム「図書館の自由に関する宣言」改訂から 30 年 - その今日の展開 - <特集> 第 51 回研究大会)」『図書館界』 62(2), 2010, p.90.
- 7 「全体報告 (<特集> 第 51 回研究大会)」『図書館界』 62(2), 2010, p.86-89.
- 8 「テーマ設定の趣旨 (「読むこと」に困難がある人へのサービスを考える <特集> 2009 年度図書館学セミナー)」『図書館界』 62(1), 2010, p.32.
- 9 「日図研と最近 15 年の“図書館界”(付: 日本図書館研究会の歴史 < 350 号記念特集> 図書館・図書館学の発展 - 21 世紀初頭の図書館)」『図書館界』 61(5), 2010, p.581-591.
- 10 「ジョージ・ポピンスキー著, 田口瑛子・川崎良孝訳, 図書館と図書館職: 挑戦と変革の 60 年, 1945-2005 年, 京都大学図書館情報学研究会, 2010.3, 日本図書館協会 (発売), xviii, 212p, 22cm, 定価 3,000 円 + 税, ISBN978-4-8204-0921-1(書評)」『図書館界』 62(4), 2010, p.294-295.
- 11 「21 世紀二桁の出発: 図書館経営難と ICT 化の衝撃 (座標)」『図書館界』 62(3), 2010, p.205.
- 12 「テーマ設定の趣旨 (シンポジウム「次代を切りひらく図書館の挑戦」 <特集> 第 52 回 (2010 年度) 研究大会)」『図書館界』 63(2), 2011, p.73.
- 13 「テーマ設定の趣旨 (読書・情報メディアの多様化と図書館サービス <特集> 2010 年度図書館学セミナー)」『図書館界』 62(6), 2011, p.412.
- 14 「全体報告 (<特集> 第 52 回研究大会)」『図書館界』 63(2), 2011, p.70-72.
- 15 「テーマ設定の趣旨 (シンポジウム「東日本大災害と図書館」 <特集> 第 53 回研究大会)」『図書館界』 64(2), 2012, p.82.
- 16 「全体報告 (<特集> 第 53 回研究大会)」『図書館界』 64(2), 2012, p.78-81.
- 17 「全体報告 (<特集> 第 54 回研究大会)」『図書館界』 65(2), 2013, p.84-89.
- 18 「「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」(2012.12.19) の成立 (座標)」『図書館界』 64(6), 2013, p.377.
- 19 「テーマ設定の趣旨 (シンポジウム「ネットワーク時代の図書館とプライバシー なぜ守る? どう守る?」 <特集> 第 54 回研究大会)」『図書館界』 65(2), 2013, p.90.
- 20 「テーマ設定の趣旨 (<特集> 2012 年度図書館学セミナー 図書館協力の現状と課題)」『図書館界』 65(1), 2013, p.16.
- 21 「戦後 70 年, 図書館法における保障と規制緩和について (座標)」『図書館界』 67(1), 2015, p.1.

- 22 「元監事・元図書館サービス研究グループ監事 西田文男氏を偲ぶ」『図書館界』66(5), 2015, p.353.
- 23 「《追悼》図書館の求道者、阪上宏一研究委員の早逝を悼む」『図書館界』68(4), 2016, p.279.
- 24 「《座標》憲法 70 周年：無料制は誰のもの?」『図書館界』69(2), 2017, p.75.
- 25 「《追悼》少壮の教授・平井尊士・元研究委員の早逝を悼む」『図書館界』69(6), 2018, p.363.
- 26 「《付. 日本図書館研究会の歴史》日図研と最近 10 年の“図書館界”」『図書館界』70(1), 2018, p.315-327.
- 27 「《新刊紹介》上田友彦 著『あるエスペランチストの夢』」『図書館界』70(1), 2018, p.329.

4.2.4 『図書館界』以外の雑誌への寄稿 (出版年順)

志保田は『図書館界』以外にも、様々な雑誌に論文等を掲載した。表 4 は執筆の刊行順に (雑誌名

表 4 『図書館界』以外の雑誌に執筆

- 『資料組織化研究』 志保田務, 北克一「NDC の汎用分類表への移行軌跡—もり・きよしの活動を中心に」『資料組織化研究』(54), 2008, p.37-42.
- 『図書館雑誌』 「今後の専門職制度に関する日図協の取り組み」『図書館雑誌』102(3), 2008, p.153-155.
- 「大学司書課程科目制定に対する日図協図書館学教育部会としての取り組み」『図書館雑誌』102(9), 2008, p.642-645.
- 「これからの JLA, 図書館学教育部会」『図書館雑誌』105(3), 2011, p.149-151.
- 「図書館学教育部会 50 周年」『図書館雑誌』105(7), 2011, p.438-439.
- 『図書館文化史研究』 「日本の司書養成省令科目における図書館史関係事項の取扱い—その変遷と現代的位置について」『図書館文化史研究』(27), 2010, p.31-44.
- 『桃山学院大学人間科学』 志保田務, 立花明彦「公共図書館を場とした高齢者の知的探求と, その社会還元に関する一考察」(竹中暉雄教授退任記念号)『桃山学院大学人間科学』(45), 2014, p.175-204.
- 『大阪府立図書館紀要』 藤井兼芳, 志保田務「図書館を学ぶ相互講座」の歩み (年表)」『大阪府立図書館紀要』(45), 2017, p.70-81.
- 『桃山学院大学総合研究所紀要』 「生涯学習への大学教育の活用：大学図書館の地域貢献を中心に」『桃山学院大学総合研究所紀要』44(2), 2019, p.67-82.

も) 並べている。

4.3 リタイア後に始まった研究活動

4.1 で、志保田が新しい学術交流の「場」の 1 つ *Journal of I-LISS JAPAN* を創刊した事を書いたが、その「場」は若手へのチャンスの提供とともに、その「場」を守り・継続するために、自らの研究発表の場としたことも注目に値する。

2018 年 3 月に、参加各国旧組織をまとめて、I-LISS: International Library and Information Science Society (国際図書館情報学会) へ改編が合意形成され、活動の地域を Asia-Pacific から International (世界全域) へ広げたことは、先に記したとおりである。同年 8 月のバンコク総会に日本支部から 6 名が参加した。また同じ年の秋、本部は I-LISS と改称したので、日本支部も総会を開催して、I-LISS JAPAN Chapter と改称した。機関誌も同じ名前にして、巻号は第 1 巻第 1 号からとした。すでに述べたが、このジャーナルは、I-LISS JAPAN の機関誌であるだけでなく、世界的な学会と繋がりがあり、新たな発表の場を作ることになった。志保田にとっての新しい発表の場ともなったのである。

2018 年から 2023 年までの *Journal of I-LISS Japan* に掲載された、志保田の著作は、巻頭言も入れると 8 本あり、ほとんど毎号の投稿があった。

4.3.1 *Journal of I-LISS Japan*

研究成果は、以下の通りである。

- 1 「日本の図書館組織における専門職団体としての矜持とその溶解 (前編)」 *Journal of I-LISS Japan* 1(1), 2018, p.56–70.
- 2 「日本の図書館組織における専門職団体としての矜持と溶解 (後編)」 *Journal of I-LISS Japan* 1(2), 2019, p.3–21.
- 3 志保田務, 山田美雪, 常世田良「参加報告 国際図書館情報学術大会 (ICLIS) 出席報告」 *Journal of I-LISS Japan* 2(2), 2020, p.33–39.
- 4 「専門誌『資料組織化研究』を通してみる資料組織論半世紀の軌跡」 *Journal of I-LISS Japan* 3(1), 2020, p.3–21.
- 5 「日本における司書専門職制度形成の失敗：転換戦略の一探究」 *Journal of I-LISS Japan* 3(2), 2021, p.33–40.
- 6 「巻頭言 COVID-19 の記憶と研究・学修の更なる決意を」 *Journal of I-LISS Japan* 4(1), 2021, p.2.
- 7 山田美雪, 志保田務, 前川和子, 大城善盛「コロナ禍の日本の公共図書館における利用者サービスの事例研究：大阪市立図書館, 神戸市立図書館, 京都市立図書館の事例：第 4 回 国際図書館情報学会研究大会 日本支部研究発表資料」 *Journal of I-LISS Japan* 5(1), 2022, p.32–37.
- 8 「日本における S. R. Ranganathan ブーム：その契機」 *Journal of I-LISS Japan* 5(2), 2023, p.4–12.

4.3.2 研究テーマとその成果

次に 4.3.1 の研究成果内容について、いくつかをピックアップして検討してみたい。最も重要だと思われる論文は、1 ではないかと思われる。なお、1 は 2 と前後編をなしている。

1 では、日本の図書館関係団体における専門面に関わる矜持について、その内実と変容に的を据え追求したもの。前編では、日本文庫協会 (1892 年設立、16 年後に日本図書館協会と改称)、関西文庫協会 (1900 年設立) 等の図書館関係団体の誕生、その矜持の醸成の把握と分析を行った。志保田は、独立性、関係領域に関わる支配力を安定しようとする営為を「矜持」と表現している。後編では、日本図書館協会の矜持の変質と、青年図書館員聯盟との立ち位置の対比を論及した。終戦直前期における図書館団体の崩壊を検討している。そして、この論文では中田邦造、衛藤利夫、松本喜一への戦争責任を追う必要があるのではないか、と問題提起をしている。青年図書館員聯盟の中心的存在であった間宮不二雄への関心が深まった事がうかがえ、それは後述する志保田の蔵書の内容にみられると思われる。

4 の論文の抄録で「“整理技術” は戦後、図書館サービスの阻害因とも揶揄されもしたが、その実は資料提供サービス上の確認の迅速化、つまりユーザーファーストを目途とした業務である。当稿は約半世紀間の書誌調整基準議論・研究を、同誌の足跡を通して管見する。」とある。なお、同誌は 1964 年 3 月『Technical Services』図書館技術研究会 (岩淵泰郎代表)、第 14 号から『整理技術研究』、第 43 号以降『整理組織化研究』、55 号以後『資料組織化研究-e』と改題し第 74 号まで号次を刻んだ、と変遷を記している。

5 の論文では、日本の図書館司書養成担当教員であれば、痛恨の思いであるが、専門職制度についての志保田の考えが書かれている。この論文の抄録には、

我国には全館種に通底する司書専門職資格がない。これは、司書の専門職性、司書養成教育、司書の身分安定・就労、経営者における雇用・人事管理、館利用者への図書館サービスの質的保証、それらいずれにも困難をもたらすところの法制的欠陥である。

と言っている。そのための志保田の打開への方向性は次のようである。

(司書課程教員) に博士号所有者が増えた。彼らの司書課程へのその採用を薦め、学位を武器に大学院マルゴウ教員化し、図書館情報学関係ゼミを成し、学位審査者の立場に至ることを望む。その者は、国際的に交流し国際会議等で棋界 (しかい) の力を示したい。この勢いが「司書」段階にまで進むならば、彼らの評価は学芸員並みに高まるであろう。これらを戦略的に主張するものである。このようなことを目途に、私・志保田は米国アリゾナ図書館協会と図書館員交流を締結し (のち JLA 事業に移譲)、I-LISS JAPAN では、図書館員の修士課程、Dr. 課程修学を勧め国際的研究機会を広げている。

と最近の自らが力を入れている活動に言及している。

6 の巻頭言では、図書館員が自らを守るために知的防衛を図るべきで、そのためには、「学位、技術への視線を放ち、論文作成に力をいれてほしい。本会 I-LISS へご参画」と自らの願いを記している。

7の論文は、第4回 I-LISS 研究大会(2021年10月7-8日オンラインで開催)で、日本支部として研究発表したものを、和訳して資料として収録したものである。コロナ禍で公共図書館サービスにどのような影響があったかを、関西を代表する3都市の市立図書館を比較研究したものであった。

8では、S. R. Ranganathan と取り上げている。ランガナタンと彼の著書は、日本において高く評価され、日本国内で何度かブームになっている。本稿ではその理由、要因を探った。第6回 KLISS International Research Conference (Oct. 21, 2022) における孫、山田との共同研究発表において、会場からなされた質問に答えるために書かれたとされる。日本における影響力のある図書館人として、M. Dewey と比較すると、ランガナタンは図書館求道者の姿を、その人柄が要因ではないかと志保田はみているのである。

2024年6月時点で、最新号である第6巻第1号(昨年9月発行)には、志保田の原稿の掲載はない。この号は83頁であり、通例より原稿掲載が多かったからではないかと想像される。編集担当の岡田大輔の貢献があり、学会誌としての体裁が整ってきていると、志保田は満足であったときいている。

4.4 志保田博士の蔵書の内容

志保田の蔵書は、当然ながら研究活動を支えた文献類から構成されている。図書、学術雑誌をはじめ、独自に集められた灰色文献、その他貴重な文献を含んでいる。このたびの蔵書の整理によって、まだ総てではないが、様々なものを見ることができた。

志保田の研究の場であるマンションでは、仕事用の大きな机の周りを、書架が取り囲んでいた。机の真正面の書架から番号をつけていったので、番号が若いほどいつも志保田が手に取っていた資料とすることができる。それらを収めた段ボール箱は、段ボール箱ごとに記号が付けられている(2024年2月~9月まで桃山学院大学の個人研究室、それ以後は有志宅に保管)。

4.4.1 蔵書の整理

桃山学院大学個人研究室での整理であるが、2024年2月21日(水)から始めた。最初のこの日のみ仕事内容を入力した(この日以後は、手書きの記録のままである)。

それ以外の雑多なもの(E)から整理を始めた。つまりアルファベットのEからD→Cと整理をし、Cまで一人で終了した。Bの雑誌の整理は、大塚、山田、四方の支援があり、4月23日(火)と5月5日(日)に行われた。

4.4.2 蔵書の確認(段ボール箱内の確認)

蔵書の確認のため、2月~5月にかけて、計9回大学に通った。確認したものは、上述したように、その他の本の形のもの(C)、コピー類(D)、それ以外の雑多なもの(E)で、(E)(D)(C)の順番に整理した。(B)の確認に大塚亜希子の協力を得た。その後、山田美雪と四方未来の協力を得て、(A)(B)について、画像を使つての目録データの入力を試みた。

段ボール箱内の確認によって、志保田が設立に関わった「美原町立図書館関係ファイル」や、伊東静雄ファイル、を確認することができた。

- 明治の目録ファイル：明治9年刊の東京書籍館書目
- 日本目録規則 42 年版
- 上野図書館 80 年略史 (1953)

などは、注目すべき資料だと思われる。

コピー (C) の段ボール箱内には、(C) だけではなく様々な資料が入り込んでいて、興味深いものを見出すことができる。志保田は、様々な目的でコピーしたのであるが、コピー類にこそ、その研究課題が浮かび上がるといえるかも知れない。しかし、まだ内容をしっかり確認したわけではないので、志保田の関心のすべてを捉えたわけではない。若い頃から関心を持ち研究を続けて来た情報資源組織、そして新たな研究対象として森耕一、間宮不二雄などには、注目する必要があると思われる。

■1 情報資源組織 C-3 (11-C-あ) (C) の 3 つ目の段ボール箱内には、分類関係ファイル、森耕一「展開分類法の一試案」(1948, ガリ版刷り)、森耕一「新しい展開分類法」増補改訂 (1950, 謹呈 鹿児島医科大学 森耕一) が入っている。

C-6 (11-C-あ) (C) の 6 つ目の段ボール箱内には、メタデータ、Digital Library (紺色の分厚いファイルにコピーが大量に収納されていた) などが入っている。

先述したのであるが、C-9 (11-C-あ) 9 つ目の段ボール箱内には、明治時代の目録ファイル「東京書籍館書目…」(明治9年6月刊) 他、『NCR42 年版』、『上野図書館 80 年略史』(1953) コピー、などが入っていた。志保田が努力して見つけたのではと思われる。

■2 森耕一 志保田は日頃より「森耕一は、もっと評価されて良い」と何度かいうのを聞いたことがあった。志保田は若い時、森と整理技術研究グループで研鑽を積んでいた。森たちと記述独立方式の議論を展開したことは有名である。森は、研究面で己にも他人にも厳しかったと聞く。研究発表の場で、森は発表者の典拠等がきっちりしていない事を鋭く指摘する(ほとんど怒鳴っている) 森を筆者も見ることがあった。筆者自身志保田と共同発表をした時、森の舌鋒鋭い質問に出会った。志保田が共同研究者だったので、答えは志保田が担当したのだが、後で「大変だったね」と言い合ったものであった。志保田は森より若手であったからか、かなり鋭い指摘や評価にさらされて来たと言っている。その森が病床にあった時、志保田は北克一、中村恵信とともに、聞き取り調査をしたのであった。偉大な森を後世に残したい、という思いからだったと志保田は語った。

有名な森の『図書館の話』がある。図書館員が新人の頃、この本を読むべきであるといわれた。司書の資格を持たない図書館長が就任した時にも、同書を薦めるべきである。現在の類書の中でも、この著作を超えるものがあるかを考えた時、なかなかないのではないか、と思われる。この本と出合って、図書館情報学の世界に入ったという学者もいると聞く。

志保田の蔵書に『森耕一蔵書目録』を見つけた。志保田の蔵書整理をして良かったことの 1 つであった。森の蔵書目録は、京都大学教授の後任であった川崎良孝が作成した。作成にあたり、北克一の協力を全面的に仰いだと、「まえがき」(1993 年 8 月) に書かれている。北がいなければ、この目録はできなかったとある。そして、北が協力者として集めた、恐らく職場の有能な部下の方々の協力があったようだ。大変な作業だったと想像できる。森がどのような資料を所蔵し、その資料を基に研究

し、思索したかが分かる内容だと思われる。収蔵されている資料の点数は、583 点である。

■3 間宮不二雄 間宮関連のコピーは、(C) の段ボール箱に散見している。4.3.2 で見た間宮不二雄への関心は、広がり深まって行っているところだったと思われる。2023 年のメモが残されていて、2023 年度の日図研研究大会では、園田俊介と山田美雪へ発表を依頼し、自身が集めた資料等を使い、ご自身を含めた 3 人でどのように捉え更に論を発展していくかに、大きな期待を寄せていた。なぜ、このように断定できるかというと、2023 年秋に志保田に共に議論をしようと誘われたのであった。光栄なことであり、自身のもつ問題意識とも繋がるテーマであったので、貴重な経験ができる機会であった。しかし、重要な別件が重なっていたため参加できなかったのは悔やまれる。

研究に繋がっていないと思われる文献・コピー類については、分からないと言った方が良い。今後の研究に委ねるしかないと考えている。

5 遺されたものは、何を語っているか：独断と偏見から まとめにかえて

桃山学院大学を退職後、2008 年から亡くなられた 2023 年までの間に CiNii では、著作が 76 件上がっていると前述した。この成果物をみると、志保田にとっては常に研究することが生活であったといえるようである。

特に、間宮不二雄については、研究の継続が意図されていたようである。「研究は趣味です」と、2023 年 7 月 11 日、志保田とその研究仲間である大城善盛と 2 人で、笑って語っていたのが記憶されている。

しかしながら、志保田の研究の中には、長年の図書館情報学を生きてきた「おもい」があると考えられる。その手掛かりとして、例えば、2021 年の *Journal of I-LISS Japan* の巻頭言 7) の中に、志保田は次のように書いている。

研究者は、大学等が対面型の研究大会への場の提供等に消極的になることを警戒すべきである。

図書館員は自らを守るための知的防衛を図るべき危機に在るのではないか。学位、技術への視線を放ち、論文作成に力をいれてほしい。また語学力を磨き国際学会、本会 I-LISS へご参画願いたい。

志保田が力を入れて来た I-LISS JAPAN では、図書館員の修士課程、Dr. 課程修学を勧め国際的研究機会を広げている。そのためにも本会 I-LISS へ皆さまのご参画を願っている、ということが論文にも、この巻頭言にも書かれている。これが志保田の本音ではないか、と考えるのである。

(本稿は「図書館を学ぶ相互講座」2024 年 6 月例会で、発表したものを論稿化したものである。)

【追記】

私は志保田先生に図書館員になって3年目に、初めてお会いしました。私の上司だった三宅興子先生に連れられて、整理技術研究グループ(現在の資料組織化研究グループ)の例会で紹介して頂きました。それからずっと、研究会や桃山学院大学司書・司書補講習に呼んで頂いたり、教科書の共著者として書かせて頂いたり、研究活動の輪の中に導いて頂いてきました。その間、先生が様々な方にチャンスを用意され、育てて来られたのを見てきました。素晴らしいな、と思ってきました。もし、自分にも力があれば、若い方たちの力になればと思います。

長年そのような先生を見てきましたので、記念集を作りたいと思い始め、2020年の夏に企画書を作って、先生にお見せしました。企画書を見せたので、先生も私が本気だと分かってくださったようで、協力してくださるようになりました。当初は1人で作るつもりでしたが、村上幸二氏に事務局として助けてもらいたいとお願いしました。そうしましたら、志保田先生は「それなら、自分を良く知る人たちを編集委員にすれば」、と具体的な氏名を教えてくださいました。『記念集』は作ることができませんでしたが、『志保田務追悼集』をその方々と作り、後世に残したいと考えています。

注

- 1) 志保田務「喜びも哀しみも幾年月」《回想・私と日図研》『図書館界』73(4), 2021, p.289.
- 2) アメリカ図書館研究調査団『アメリカの図書館』アメリカ図書館研究調査団(国際文化会館), 1960, 96p.
- 3) 日本図書館協会編『中小都市における公共図書館の運営：中小公共図書館運営基準委員会報告』日本図書館協会, 1963.
- 4) 日本図書館文化史研究会編『図書館人物事典』日外アソシエーツ, 2017.
- 5) 当時『志保田務先生記念集』の刊行計画があり、編集委員会が作られていた。
- 6) 前川和子「LISSASPAC, 韓国図書館・情報学会共催の国際学会：随記」*Journal of LISSASPAC JAPAN* 1(2), 2018, p.50.
- 7) 志保田務「巻頭言 COVID-19 の記憶と研究・学修の更なる決意を」*Journal of I-LISS Japan* 4(1), 2021, p.2.